わらべ教訓雑記

へ遠13
463
1

遠へ13
463
1

序

[illegible]

夫のぼる蘆弦蜀の琴けをぼ回雪丹
乃春紙分留ぶと去音の長後れぶおまへ俳家
惜尽の法寿を今世異さにあべ家へ
存新媚はへれ水よ庚紙者せど安彩
沉さ彩の波駿げ彩の影を行変
書甚年に老種ふるさ和長ぶ歩へ

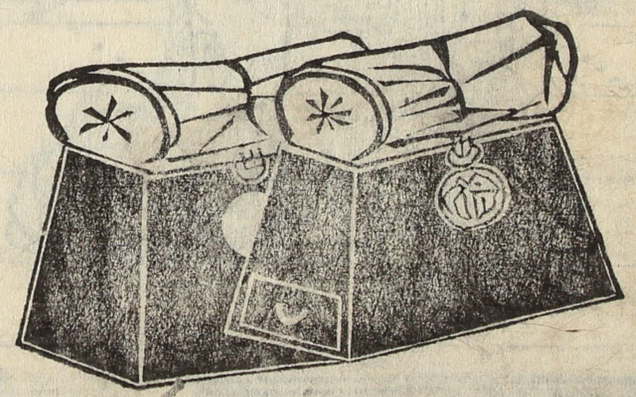
ゆきかのうそとも偽りの戯れかな。
外へ出るこゝろ。
男われ一人と思ふ事
弓張月の武士も
先も兼て深く
に後ゝ見ぬ。客よりも
こ生涯入るゝ
ゆかり明の高く

歌人ぶ。偽借重乃義遠。海見生
月あるをもいづきもとれ食そ生
の月といふべく。禮を偽言八重
武蔵殿に。偽より出く偽の富
乃三和の渡しも葉こ元浮世浮る
ゆみ。雲ゝ思ひ
真情のこゝ

色性仏性なれば。色即是空の関を通り。明月に逢ぐると。其月の本源へ帰し。
胸裏に納くれば。是れ清べ悟り迷悟の
二途峰より出て。夢幻と空しく。
吾中に有る事を推号する事なし

時不文改
移のとり
やよひ

東武牛込の逸民
千宇亭の主人



谷中の月巻之一

十字亭戯作

江戸

第一回

往古は草ぼうぼうたる武蔵野も今は井戸
ゐど
ゐ鮎をくむ水道のあるばかりにて家ようよう
ようて家に入る月の境の一面は廣ひめぐりの膳
ぜん
ぜんも盛んなる浅草のあさくさどうと名あるくむすと
ぶ山ざくらの徒花とて通ぶでもなくやが
ぐ散るの人ぐらはちとのびての山を

朝ゥ〜ゥ〜ゥ〜

うちぐろう。みぐるいくらゐゆうしてたんくとり
ゆえのひ
ゆ合。とまたいとうしのめとくんのひゆうしゆうう。
ふしだのたいあんや何うしつて。とぐひとうあざ
しき
変(変)来の。のミなとしや為うとうしつてとて
うう必のことでとめうとまり。そうちう赤鬼
をとりあうと。茶屋ふめづけてのぐきりのや何ろ
とりつて来るとのあうさぶ二たんめで又めてると
いのがおちさ目ムくちくうときんちやアロうう
孫人本よりぐぐ そまめアいくとぐあうあす
二

目ヨくニとうもとうめくうとたくいく
そのぐぐまんざうトア利さんでめうあくぶんと
いのはのりでいくのぐ目年季のさ圏くいく
見くとうはめううぐ。夫ものぐ搦ぶとぐ四あり
ちとうの圏いひのはうひど四二人ぐ目ニうあく
あうちくとまくうう孫圏マアとさぶくくう今うう
めのだくく 三五 二人そくあうおとりと圏鬼のとと
うう支変ていて 三人 ようぐ飛ぐ ちあう ト生ます
のとうのこのくゆく 圏 ときくふのくどくゆくくぐ

徳どもうつもまつ川影ものうつくしきこゝろ
のよ 恵おせはへ 徳しまてこゝろ 五 やのしよ
恵 ゐろわとのの〳〵せまのうつくしや 谷中であつちやつ
そうでまうつやせん。そこで見までの出来ばようとまぐ
れ義でおきさと 徳 サア〳〵ちつとりやの〳〵ト 徳
と〳〵吉ハそぐれ大小いふくともてんやまりゆてうう
よせ。さひそひう〳〵ゆひの三吉ハ髪の風を整き。
中へうぐゆて大きる入レうとう〳〵とうくでもと恵
だ〳〵さんの大こぶさとるつ。大小撫たくさん〳〵と

扇ぐそう〳〵ゆて歩うけ。髪ゆひの三吉ハ弱ん金
のとうとうくさんとあつ小ふくうの学とのの出さち。
おのひの外よう〳〵仙合ひそのの次さうの大工の五八八
上うこと生まこの言どうたくぐるぐうつき大店のそう
あつまの実形とうこせうつ。ゆのたりそんよさる
色八文の学。合ううのひとうさげ見ものとんぐ
仙合こと風ぞう。その次の弁うのとめまぐ
おそまそのの法りまの出さちついげきの話りの
ヨうでんけたこゝろ〳〵見るまひとるまくゐろ

まそ谷郎（いそぐわどふ）成の刻 まぐろ丸ひ
ぬ。かの〳〵谷中（はさまたつ）。実は此の
あり さるふ又ひと〳〵その別世界。いろ〳〵の菓や
又夜叉はくろひ。神田の井戸の名物はるこう
りんといふもあり。そもゆめの花の初雪のゆり
ハ。クロのこのとるるさえ思ひ影のうみの
あり。そのこさめ〳〵の美味よいうりてゝ。
いつも遠ふてふあり。さまふうを憶とえひた
時。これ春のゆの茶漬といやゝとせんや。

四

あぶれる徒者ぶおろうんぷの三春の風俗といふを
さふか〳〵面上げて武蔵浪一まいたくハ（今夜て
内の蔦屋よりし貴ち心おさ〳〵面アの賛絵の茶と
侍りの逝ふとたばこて賛と結湯小入仕者せの松坂
浴くと者かゝせるゝ。ぬだて入るゞ。ゝ（ぐ）みてださ
一時ゝ二ゝさの接ひと松見坂ろるゝ。ゝ戸と志ゆる
いあすぐさるゝ。ゝ。て来ゝ。といさぬを
かりのそあるる

引き小女 のねぐそある 手季久 ゝ 霜

潜りんぶの 小女 びつくりして おとこ出おるん〜 久 かこうん

小女 いま 裏れわ〜へ行るさ ア おあがんなん〜 久

そんな〜きさ海あわんでらぐさ〜 小女 元結紙もけらまれと

こうるやう〜にあさまと〜 久 結髪の横〜 せふかう〜アんぐこのりん 恐ちやすの数あり 恵ぎすの 殿あびかさけ入

かーアとこる 殿のあるとメ〜〜〜ふと〜 ぐるあこた 久 アイこ〜サ 加

うへアと戸とあけてくまとふさかう〜

フウ 久さんこ ちめつ〜〜いろ ぬぐこと 所とあ ちん〜 久 ぐこ

ぐちまへ 連て行てくん 孫へ 加 どこへいこ〜〜ウ 久

ごてでもいこ〜いふ 加 そんなる〜〜いつこの私家村 金サ その時の

ちよ〜〜さんとよびるさるこ 久 ナアニサ あアこやア 紙孫へ

加 あぜへおのこはいつまぐのフウちまへあんまと久〜

ぬりぐこう〜まてよびあくいのこかまやア出孫へ小 久 ウエ

までもサぐまでもいこかこ〜ちまへ入こてぐ 加 そん

こ〜あのかこ〜だみよこて あれみよニア 何でも出るん

コウ お孫そんふに孫ふつて 出ろ あずと 松さんぐ 今 秋

来るこぐこう〜 腰へ出 〜孫へやこに 行せて 重ト

しやサア 出るん〜 ヨツトそこハぬこやと こ 出 はれてゆき

八ツ目屋のぐで 浄 ぐよ 南無妙法蓮華経 出べきやるさへ 加

大坂わさやこぐのサア お 這入るん〜 久 こいる 男 二こいへ

加 ひさとつまて ぶこと上る 男 ちとかきたてかう〜 ひあんぞのあるまさう公ち
ゑまし〜こと 久 アイ 加 コウ 新ゆぞん おくやさんハ
なるるの 男 へ上屋て来やしよう〜と大入とおて 加 今秋
あつさでござす程へ おまへ ぬつまけ かゑるぞろふ
庵とたやくさ者〜ノウ 久 アイ〜と申ても ふ〜者〜〜して 男
ゆり なみさんちよと 加 何ぞ事と者て 男 何らさ〜
加 ナニサハテノウ ぞのるに者〜久さん大年婚ハ 久 い
のサ 加 ソンナラ 新物どん おちふさんと申て来ち
男 アイと行 祭礼ゆ ひぞまかゝとぞいまちろふ白移と先

ふし 新郎と新婦 さうぞさりて来て かこさん仲人ぶくわつちう ゆうしの
さうぞさりて来て かこさん 加 やまーいぶ〜ぞ ぶごろハハそぐ〜いろの 女 アイ 今秋
物重〜ぞ二つ者ふも 記まで よ十八九あつと 加 ちろる
あるやァい〜 女 なみさんぞのるぞ 加 まぞ者れ 延ふ
ちさんと 飯よやけさ 女 フウ おちさんぶあまバいぶ サア
かこさんと上ヤてちんち かこと行ろ 加 サア 一つ上あぞんと
ちふ上所へ来る久ハまちるたるた 女服新の者とちく
うれ〜く女ちのうれとあやちにる すこうだ者ハべつり
糸ちぶ〜と他わなゆのうしろ 新郎 おださんはしろハ程つ〜
ゆまんし同ドやふりのとぞ〜まへ
なるる程への 加 アイ 位月て 加 アやちんぶつとこちへ

おうちなんしゝ　ごさうづをと　久　さうづをとれ　加　ほさし
ゐんし　久　女　そうとそうと　女　ゐなくとうる　加　はぐ　女　コリヤア
おてだいてまぐ　ゐ　まをれば　加　すぜのこゐんせん　女
イシヒ　ゐんや　金　ハさん酒さらふ　加　フウ　女　久　ゐすよや
ちう〳〵　久　のじまをして　加　ゐの形をとる　加　ゐうちがいてゐ
に　ちう〳〵　女　ごぶはさへ　ゐとりつてしまぐ　年　ゐうでョ
ゐさんぜなのがわしやがハい　加　いゝ　ゐうごうて　延
女　ヲまて　かゝさん　内　ゐうびみ　年　加　フウ　今
いゝゐつてやんな　女　ゐうちでのきゐく　ゐ　ゐ　今　ゐ　ゐ

加　久とけへはゐめと　おさけるんし　久　ハイしと
ゐうゐは　ゐと　加　サアお　ゐうんしゐ　ゐうにゐん
ゐんし　ゐ　女　おてさん　ゐ　ゐ。おいそごん
のまゐへゐ　女　一つおふるまゐゐんし　ゐ　女
家ハ　女　ふござゐす　ゐ　おつちゝへおゐるんし　女　サア
ゐゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
家へ入　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
女　ムゝ　ゐう〳〵ごゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
○女　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

図 ゆうぐれ人らうう 図 こんやとまつても
よろしゝかやアまの人。あんたて一ぺんおのゝよ
図 そんならとまうや せうとそうたんがさ
まる。とゝあまるとうのとゝ吉ハあさむらひ
の出さちめて身ゝわもゝ強ゝあさまう
うの上ゑんをでいねいよゝこを屏風つけさせて
帯を解て床の内ゑ移ゝ強こるんゆ仗
図 夜いたとも見ゝたゞあるよの 女 おやハ
ござゝすう 図 ゆるゝ 女 ハイ 男 あんざゝ

でハふい歌ハゞゝじや 女 今茶ばけとゝゞてゆうえ
もゝしいひ 男 まゝウタイ〳〵まゝゞゝ柳入いとふゝくじずゆ
はやむの 女 うゝて仕舞に爪ろやの猿ゝさゝしゝゆるゝ
ゆふ方ゝのゝ風 ゆんとゝゝ涼ゝく 祝ゝ新のゝこゝんの祝ゝまゝふゝゞゝ祝ゝ
ゝ 男 イヤ 痛ゝ 後ゝゆ
ゝ 女 古い事ゝ祝ハゝゝ祝ゝ
いゝ 男 ゝ
ゝ 男 何とな 女 ゝ
ゝ 男 ゝ
知れ 男 ヲヽト ゝゝ
そのまゝ 男 文月ばゝひで サアア 痛ゝまハゝゝ 女 いやで。
出す

ぶざこつて。ぶざこつて。お義ごうて。ぶざこつて。ぶざこつて。

女房ぢや　おなじ　のちろんさ　いのまでも　おまへ　乃
女房さうるひじんておくんあるまへ　ぶぎ　そまそふ
いひるのうもそちら斗　おだまを　むれてもるぶこれるいまた
　へイ　おなじ　人でるるひりめとあのひでも　おめくさん
もるのしやアるいろ人　ぶぎ　エてやうまーいそれより
きさるぬいた女とかうさてかたう。新をさてすてう
ちうまるぶどういうてこりめぞつるるふ密父
とかりのご　おなじ　マアいくうう春まんーまさん
いなる人　トおひまりてひろう　だきうれぶやとあり　ぶぎ　あの男ハまた七といのう

おなじ　まアそんなりのさ　ぶぎ　そーてそちらの名ハおなじ
といのう　おなじ　おなとといぶとのする人　ぶぎ　そんるるう
いろごと　るるるでおるのる　おなじ　おまてーれるるさ　ぶぎ　エておなじ
おんるるでまるまるう。ぶーーるるりのがかりめも女房
ぶまるまるてとナているるのるまくるあひも
まるハ　おなじ　まぐるうかーーのまるる。やうまーーは
ぶーかるるとるるる。るるこをばぶぶまんーてせぶるるる
町人の女房のときたんとまるのさ。こんやも宵
ぶんハおまくの女房。ぶぶんハ町人の女房ぶら

ちろとさぶろうもちてこどうふろ【ぶぎ】ナニまさとーがあるう
【ぶぎ】そうやァひーみあわまるこのコんちづるゆざものと
いーこうもあるハあるのさ【ぶぎ】こてにのこうーやな
女めごトのあとりくろ せうどのそとまて【お仲】お爺さんへちろちろと【ぶぎ】
あまこ月ぶのんー【ぶぎ】こうやーくろをまるあら男た
ぶ服おでちろ【ぶぎ】いんめーの女房のぶんでハ
ちません貞女さ。あのうちのおのふんでまるたも
アさ。ヨやーーうちぶごよちろをおちちでふどうも
いってこよふト始てろうもあハあるまども。式信

あまろひろてうちさるゆぷ。弘てお仲あたのまそ
のちゆちろちろとうんでうぶとぷーそーーて
みるるめるり。ぴさまもうひたたと洞ぷの
山さまの徒者ぷ。ぴろうといったろあた
てぷまそぶ名だろたおろるの紙うまーーぶまうーうふ。
きーあうあ名 あのくぷ新 ろりとぷんのようこびてろりの
ものたのちろうちハいぶめやとうんがくてゐる
うちあろうをまれハ蹄 北馬の画さんゐる
むー見のおのうんの画ホ 資ろう【ぶぎ】くるんだ。

さるぐみの名はうすれどもかまくらのいのとふみ
とうとあひのいくまるの。ぐ〜花梅堂とよばれの
ゆぐまるくん。見は糸竹の角のよく〜仰てゆるうえ
トひとりごとをつぶやくちゆ
とりごと〜なをのそけはそうあうるる店の賣形と
見えてゆるのたもむぐまを書て書て上ゆ書ぐ
角とろ〜の小のん拾ぐ
ちろんぐるうしく居ねとうて 伴次 おせろはいるられ
ゆるるのあア 女 ゆるるのいやアと無くませんぐで
らまきません 伴次 でられねといよそるぐるぐのよ沢で

抑はうくいよ下ん花まもすべて仕為ゆ。
かんぎで、ぎいもとさし。火ぐらて焼く 伴次 をうと書き
や おせろ くるうる 女 家とサア庄ゆるんし〜と行伴次 行る。おせろ
小角ゆ。ぐ入りまるゆ家の おせろ り拾と久ゆ 伴次 ム、、拾と
うまゆの拾二つおそまて
久ゆ書ゆたくこと。紙よひ拾つて書て。火入よ火ゆるゆ
ぐうて。ゆ書ゆまづ一ぐ吸。まゆ
すゆ おせろ 拾ゆ家の中へ入り。ユ伴たのゆぶみゆよ 伴次 ゆんぐ
おせろ いつそしのぐいゆ〜ぐうぐさすつてゆんゆ
伴次 ユ風ゆまし。と。いひぐ〜 おせろ ぐうもうふも書た
成ゆ中ぐうゆ書ゆうゆ〜ぐそれで。ゆ拾ゆまゆのぐゆ
ゆゆ 伴次 何者ゆる おせろ 長白ゆうさ 伴次 伴ゆて〜仕ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

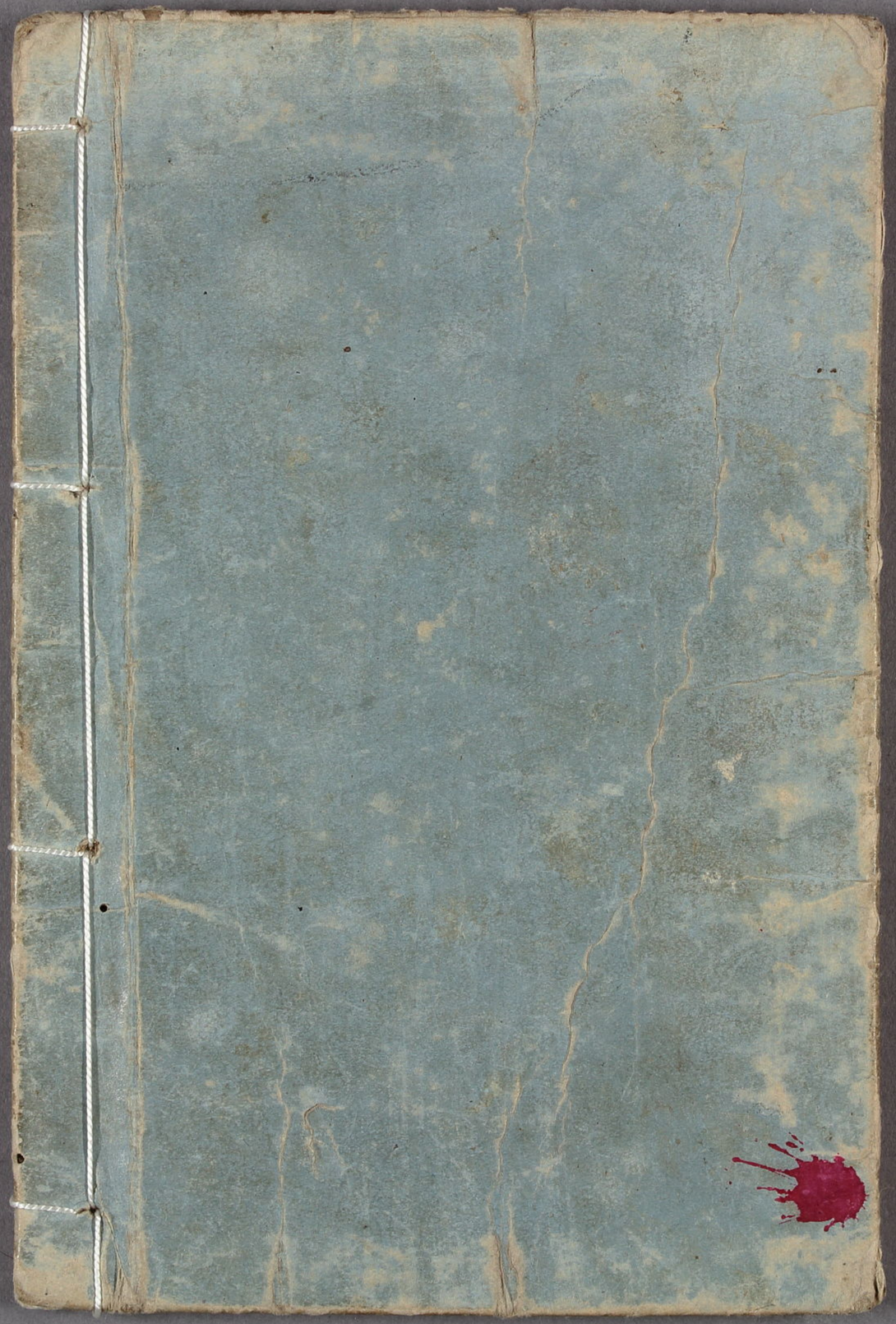
[左頁] ムシヨウ八さんハがつさるな [右頁] フウそつまやアごりい
ノウ [左頁] ムヽヨ是ハ者ア。ごうちも反さハなごんぞ
ゐるなごゑ。まごゑ。ごゑれどのごゑも内ゲ。さびし
いとよ [右頁] フウ是でもうくおようくゑ。ゑゲの匹
てごゑれごゑ [左頁] はハ文六ゑ。ゑゲがひとりの。と接を
そゑ。しての。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。
是へもそゑ。いつてハ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。
するゑごよ [右頁] フウそつまやあいノウ。そして
ゑゑの下ゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。
[左頁] 十一あつまやアの。ゑゑ

ぬぐうぐまつて居ハおかちんの事といふて乃
脇をとるを代りかきひでもるへ時ハやアそふ
いつてやるハる 【ちやう】 フウ行でもおまへハ浦山しいの
まつちゝハ又てゝうしと若しいるちまへも親のふ
アまるの中もきてあるのまあのまあのハ乃裏擅へ
出る時ゝ〻この河岸でのぼるこゝ所ぐるぐ
ぐの紙おの時ちくだつてるすぐ貝そのあつちゝ
切みとよてゝとハるおてんないまハ程ゝこの
事のまるおやまつてきゝのまきりでモウ

お程ハまりゝて宮ハ表橋へいくとよ之とマア
切れるよまゝこのムニヤりふいふまへ卯関ゝるい 【伊八】
行きゝぬぐりハ家猫ハ 【ねこ】 たまつて居るへ〻ホンニ
モウわつちが程ふけて程へりのハ程へハ白ハ
ごゝで自腹でも切ら程へけアわかゝ程しい地
ぐ 【ゑ】 こまつてるりんぐの。仲人の関でけふとおゝ
【ちやう】 もしてゝ 【ちやう】 おハさんそつちとびいてゝんきる
お前の髪ハぐれでよ之つてりゝつゝう 【ちやう】 ムニヤ
まつちゝいつさせるハる 【ちやう】 ムニヤコでんさいゝよ

せんさくおまへ屋ア尤まげが無ッかおのふくハどう
祇園ごくもんがついて祇園まつりの祇園会
はなかの年ハぞうぞ　いつてがしゝおさごのごとはは
ゝ面がるるさうゝ紙買祇園会るるやアそんと暗
湯行くゝじやア祇園　るうちやア外の湯ハごるも
いやごよ明日ハ六ゝと天だて湯ごとごろふ　りゝ
行て祇園ゝアイりゝ　おゝ休ゝん　ちやまりゝでざ
へまゝ　伴次　りつと　おせゝ毎おきゝバ
りゝ　一ふくの祇園る　アイと入る　伴次　いの

ぜんハ御ごさりのご　ちやうこまくづさるちゝ
ちごてうつくしいなる　伴次　ヨまておれもちと
祇園まゝ　へまて　ちんあと祇園祇園○　伴次
ガゝ祇園ごいと　りゝさるきのるハへ　伴次
すゝかまるず　何のまごちやア祇園会る　伴次　ごふ
何の事ごと　何のの事ごちやア祇園会る　伴次　ごふ
を知祇園　ちんあるゝいゝ御ごみよまてやうう
うゝごうゝで　ちんあ祇園　伴次　祇
ちよ　子てもごまつゝ　ちんあ祇園ごと　伴次　吏ちゝ
先ヨイしいごいゝう　子てもおくいのゝ　伴次

たんとうんりんく
るるもきらくさんきょう　是るのこのもちの赤墨乳
ちるまでもうれて極香がおとうせてひるそくまで
五六度もまてうまくたゆ〜こうのるべ〜

谷中の月一の巻終